
ザビエル＝クエスト

Joker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザビエル＝クエスト

【Zコード】

Z9614M

【作者名】

Joker

【あらすじ】

関西では名門として知られている桜ノ宮学園。教師として勤務している裏山は世界征服の夢を捨てきれずにいた。いい年こいた大人がとか突っ込んではいけない。彼はルエビザ教団という、逆さから読めば冒涜以外の何者でもない宗教の指導者として裏社会で名を馳せていたのだ。

これは学園の教師たちを懷柔・手駒とし、日本の政界に進出すべく活動するサクセスストーリー（？）である。

プロローグ

ここは大阪にある桜ノ宮学園。

明治時代から続く伝統の男子校だ。

その学校の中では

「裏山君、あとで理事長室まで来なさい」

牛の頭蓋骨を頭に被つて校内を闊歩している初老の男が職員室で朝っぱらから麻雀をしている四十年代半ばのサザエヘアの教師に話しかけた。

「はい、キタカド理事長」

裏山と呼ばれた男はニタニタと笑いながら牌を切った。

放課後、裏山はネクタイを締めなおして理事長室に入る。

「失礼します」

「うむ」

大理石の床、黄金で出来た机が目を引く。

白銀の椅子に腰掛けたキタカド理事長はふんぞりかえっていた。

「理事長、お話というのは？」

「君、明日でクビ」

裏山は耳かきを取り出して、三度右耳をかっぽじった。

「今何と？」

「だからクビ」

「次期理事長の座を譲つてくださるのではないかつか？！」

「何を寝ぼけたことを言つてるんだね？」

「何故ですか。私ほど模範的な教師はいないはず」

「君、先週生徒を勧誘しただろう」

「はい。ルエビザ聖典を生徒に五万円で売りつけました。これで彼

も立派なルエビザ信徒に」

「それを世間一般では詐欺というのだよ。ビリかの国の元総理大臣と同じことをしないでくれたまえ」

「しかし、我が教団は資金難で」

「どちらにしろクビ」

「理事長、私はこれからも教団のために」

「ていうかクビ」

「お慈悲を。ルエビザの神にかけて」

「もういいクビ」

「お前のか一ちゃんデベソ」

「クビ決定」

「ていうわけで裏山のクビが決定した。

その瞬間理事長室のコードレスフォンが鳴る。

「もしもし、こちら事務長の小川ですが。警察からお電話です」

「なんだね、私は今裏山君と話をしてるんだが」

「蒼枝先生が名神高速逆走して、しかも警察車両ひき逃げしたみたいですね」

「ああもうー 何でうちの教師は世間から一億光年くらい離れている奴らばかり採用しとるんだ！」

「とりあえず大阪府警本部長からお電話です」

「うむ。ついでくれたまえ」

「あ、まだあります。社会科の中田先生が比叡山延暦寺で『仏敵退散』とかわめき散らしながら対戦車バズーカを乱射して寺を炎上させたとのことです。こっちは滋賀県警から」

「うちの教師は私をストレス性胃炎で暗殺するつもりか？」

「とりあえずお願ひします」

事務長はがちゃんと電話を置いた。

「というわけだ、クビ」

理事長は裏山に顔を向けずに叫びた。

裏山は肩を落として退室した。

しかし、その瞳は元気らしく輝いている。

「ぐふふ、理事長め。この私に逆らつたことを地獄の三丁目あたりで後悔させてくれましょう」

裏山は携帯電話を取り出し

「私だ。プロジェクト＝ザビエルを発動。鳩川紀夫総理に至急連絡をつけるのだ」と指令した。

プロローグ（後書き）

こんばんは、Jokerです。

新作です。といっても元ネタは高校生の頃に書いてたものですが。

お楽しみ頂ければ幸いです。
バカなお話ですが。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第一話・事の発端

2010年夏、グルグ火山の火口に一人の男がいた。

「ぐふふ、よくぞいらっしゃいましたキタカド」

サザエヘアーの男がにたにたとした笑みを浮かべている。彼はこのクソ暑いのに絹で織られた黒いローブを纏っていた。

「何かね、裏山君。私は忙しいのだが」

同じく黒いローブに身を包み、頭に牛の骨を被っている、いかにも危ない初老の男が返事した。

「それはお忙しいところ、すみませんでしたね。その忙しいのも、すぐには暇になります」

「何？ それはどういう意味だ」

「こういう意味じゃハゲ！」

オッサンによる子どもの口げんかは始まった。

サザエヘアーの男は牛骨を被つた男を灼熱の熱気が踊り狂う穴に向かつて蹴り飛ばした。

牛骨の男はかるうじて両手を引っ掛け、マグマに飲まれることから逃れる。

「たたた、助けてくれたまえ！」

サザエヘアーの男はそれをにやにやとして見下ろしながら

「さつさとクタバレ！」と手を踏みつけた。

「ききき、君はそれでもルエビザ教団大司教かね？ 神は君の行いを見ているぞ？」

「うるさいですね、このカビ臭い宗教オタクが。そんなんだから、アンタはオダインに教団資金を知らないうちに横領されるんですよ」

「何？ オダイン君が？」

「ええ、資金を競馬につぎ込んで全部スつたそうですよ」

「うぬう、後で異端審問会にかけて火刑に」

「そんなにかけなくとも丸焼きになりそうなヤツがいますけどね、

目の前に

「裏山君！ 私を引き上げてくれたまえ。 そうすれば次期教皇の座を」

「そういうのをやるやる詐欺つて言つたですよ」

「このオタンコナス！」

緊張感ぶち壊しのセリフをありがとうござります。

「何だとこのデベソ」

割と頭の悪い口論を続いていると、裏山の後ろに筋骨隆々とした大男が現れた。

「大司教、例の仕事が完了しましてございます」

痩せた頬を持ち、めがねの奥の細い瞳がぎらりと輝く。纏っているのは某有名な格闘ゲームの主人公が身に着けている、白い胴着。

「おお、マルちゃん。よくぞやってくれました」

「裏山君、私のいないところで一体何をしているのだね？」

「そうですね。宗教馬鹿に冥土の土産に教えてやつてもいいですう」

「私は巨乳派だ」

「何の話ですか？」

「だから、メイドだらう？」

「五十年代で痴呆症が始まってるんですか？ アンタが逝くのは冥土です、め・い・ど」

「おのれ！ 私を騙したな。軽犯罪法違反と痴漢容疑で国際司法裁判所に訴えてやるわ！」

「アンタが勝手にカン違いしたんでしょ？ てか、裁判所行つたら裁かれるの、我々ですよ。一応邪教徒ですから」

馬鹿な応酬が続くのを呆れた眼差しでマルちゃんと呼ばれた大男は見守っている。

大男は腕時計を見ながら裏山に耳打ちした。

「大司教、そろそろ鳩川総理に電話を繋ぐ頃合です」

その声を聞くと裏山は頷き

「とりあえず、我々にはもうアンタと遊んでる暇はないんです。そろそろ幕にしますよ」と言つた。

「待ちたまえ、私にボインの〇一を集めてハーレムを作るという使命が

「辞世の句はそれでいいですか?」

「いや少し考える時間をくれ

「あと三秒です」

「裏山君」

「何ですか?」

「ハゲぼよよ〜ん!」

「さつさと落ちなさいこのツルピカ」

裏山はキタカドを蹴落とした。

牛骨を被つた男はそのままマグマの中へと吸い込まれていった。

「さて、マルちゃん。行きましょうか、まずは鳩川紀夫との交渉へ裏山はにたにたとしながら、グルグ火山を後にした。

第一話・事の発端（後書き）

「んばんは、Jokerです。

何故こんなおばかな話しが書いてあるのだらうと思っています。
ストレス解消にはもつてこいだからでしょうか。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第一話・史上最低の会談

学園の理事長室に戻った裏山はさっそく電話をとった。

「『ホールドが鳴り終える前に求めていた相手が出る。

「やあ、ボクは愛の救世主鳩川紀夫。君はどんな友愛を求めてきたのかな？」

「いきなりのトチ狂いつぶりには親愛の情すら覚えますね。はじめまして、私はルエビザ教団大司教裏山です、ぐふふ。以後お見知りおきを」「

「残念だが、今日は寿司と焼肉の食べ放題で忙しいんだ。愛は平等に国民へと注がれているからね。必ずしも、日本国民といつわけではないのであり、当然のことながら、愛は足首萌えであることからしたがって、会社生活がぐへへへへ」

おかしい。いや、会話内容も十分おかしいのだが、電話口から『おかえりなさいませご主人様』という若い女性の声が聞こえる。電話先は首相官邸のはずなんだが。

「とりあえず、あんたがおかしいのはよく分かりました。用件だけ手つ取り早く伝えます。そのラリつた頭によく叩き込んでおきなさい」

「秘書がやつたことであり、私は脱税を知らなかつたんです。ママ

ー

裏山は軽い目眩がするのを抑えながら宣言する。

「次の衆議院選に、私はルエビザ聖王党党首として出ます。日本を掌握し、世界へと羽ばたくのですぐふふ。覚悟しておきなさい」

「日本は日本人だけのものではないッ！ 愛を思う我々友愛の民と朝鮮連王国が愛の名の下に愛の国を作るのだッ！ 愛さえあれば

がちやり。

電話を切った。

「こつまでもキチガイの相手をしてられるほど暇ではないんですよ、

マルちゃん

「はつ」

「早速選挙のための戦力を集めます。まずは……」

向かつた先は刑務所だった。

「ワレコラ、テメエら俺を独房にぶち込む覚悟は出来とるんやろなあ？」

金髪の髪をほつきのように逆立てた若い男が監獄内で暴れている。彼の着ている特攻服の背中には『邪乃殺威怒』とプリントされている。

彼は都市暴走族『武装戦線』ヘッドの蒼枝。関西を一分する勢力の頭である。

「保住は捕まつたんかコラ」

「知らん」

保住^{やみらたい}というのは『武装戦線』と対立している都市暴走族『愚鍊邪魅羅隊』^{ぐれんじやみらいたい}の隊長である。名神高速でのバトルは週末の名物だ。

蒼枝はどかりと座り込む。

「クソが！ 脱走したるから覚悟しとれやワレ」

そんな時である。

『不審者』が刑務所に侵入、不審者が刑務所に侵入！ ただちに捕縛せよ』

真夜中に物騒なアナウンスが流れた。

『人数は二人。サザエヘアーのおっさんと、長身筋肉質の若い男。ルエビザ教団幹部と名乗っている』

「お前はそこを動くな」

そう言い残して看守は変な侵入者一人の撃退へと向かつた。

変な侵入者は看守たちを相手に大立ち回りをやらかしていた。

「マルちゃん、ここは任せました。私は蒼枝を脱獄させてきまや
これが衆議院選前にバレたら出馬すら出来ないということは考
えていない。

「さて、ぐふふ。蒼枝をそそのかせば兵隊を得ることが出来ますね。
まずはここからです」

目的は蒼枝を見方に引き入れることである。彼は理事長と対立し
ており、裏山とは対立関係になかった。そのことを考えれば、容易
であると裏山は考えた。

五分ほど歩くと、騒がしい独房を見つけた。
「そこには蒼枝君ですか」
返ってきたのは意外な返事だった。

第一話・史上最低の会談（後書き）

いんばんは、Jokeです。

半年近くまつたらかしこしていて申し訳あつません。

とつあえず更新です。

こんなおばかな話ですが、楽しんでいただければ嬉しいです。

それではまたお会いできることを祈りつつ……

第三話・百円玉に命をかける男

「あれ？ わてに何か用ですか？」
ねずみ男のような外見の男が監獄に入っていた。Tシャツにジーパンというラフな格好だ。

この男のことによく覚えている。元同僚の加島だ。

裏山は立ち止まつて考えた。

こいつの能力も使えないことはない。
使い捨ての駒くらいにはなりそうだ。

「これはこれは加島先生。先生の盗賊技術、是非我タルエビザ教団のために貸していただけませんか？」

「嫌ですわ」

即答だった。

裏山は額に青筋が立つのを抑えて

「……報酬としては月五十万円を差し上げます」
と切り替えした。

「嫌ですわ」

「では、百万」

「嫌ですわ」

「では、二百」

「嫌ですわ」

懐からベレッタを取り出そうかと手をかけたときだつた。

「百円玉、五千枚なら考えますわ」
にやりとした。

そうだ。こいつは百円玉に弱かつたのだ。百円玉で釣れば、日本中どこにいても釣れる。

「分かりました。ご要望どおりにさせさせていただきます」

「契約成立ですわ。ほなら、わて、ここれからすぐに脱獄しますさか
いに」

小柄な男は懐から取り出した針金で手際よく、鍵穴をいじくります。

数秒とたたずみに鍵を開けた。

「どこに行けばいいんですの？」

「とりあえず、ここから出てください。私は蒼枝を脱獄させねばなりません。その後で指示を出します」

「わかりましたわ」

加島は薄暗い廊下を物音を立てずに歩いていった。

「さて、予想外に時間を食いましたが、ここですね」
がちゅりと独房の扉を開けた。

なるほど、蒼枝は危険人物と認定されたらしく、扉までもが他の収容者とは一線を画している。

「つねりあッ！」

怒号と共に金属バットが飛んできた。

それは裏山の前頭部にめりこんだ。

「加島あ！ テメエよくも通報しやがったなワレコハ！ 東名高速逆走引き回しで済むとか思つてへんやうなワレ」

金髪ほうき頭の男は胸に『宇宙爆発』といつ文字が書かれた特攻服を着ている。

「Jの男が都市暴走族『武装戦線』ヘッジの蒼枝だ。

「相手をよくみてください」

頭に突き刺さったバットをとる。だらだらと流れる血をぬぐいながら、ようみると裏山は立ち上がった。仲間にする前にこちらが天に呪われるところである。

「テメエ！ 裏山ッ！」

「あいかわらずお元気のようですね。どうです？ ルエビザ教団に協力し、日本を支配下におせねませんか？」

「まずはテメエをボロらせや」

「もう十分ボコつたじゃありませんか」

「次は名神高速引き回しじゃワレ」

裏山は思案した。

「では、事が成就した暁には加島先生を名神高速引き回しだして出来る
といふことをお約束しましょう。どうです、これで我々の仲間に。
もちろん、加島先生もいるので、いつでもボコりたい放題です」

蒼枝は頷いた。

ちよろいものだ。

裏山はひきつった笑みを浮かべながら、いやいやしく頭を下げる。
「さて、まずはこのかび臭い牢獄から出るてしましょう。すべては
それからです」

第三話・虹田君に命をかける男（後書き）

いつも、こんなにちば。

長い間放つておいてすみません。

お馬鹿な話ですが、読んでいただけないと飛び上がって喜びます。

では、また次回お会いできるのことを祈りつつ……

第四話・生まれる時代を間違えた男

ルエビザ教団本部、もとい桜ノ宮学園理事長室では裏山がソファにどっかりと腰を下ろしていた。

「ぐふふ、次は日本武士道の絶映を味方につけるとしましょうか」日本武士道党党首は『生まれてきた時代を間違えた』と言われるほど変わっている人物という情報がネット上で流れている。もちろん、それが間違いではないということを裏山は知っている。しかし、そんなのでも味方につければ頼りになる。

「ワシは誰じや？」

日本武士道党本部にある門では髷を結い、刀を背負った男が立っていた。

齢五十くらい。柔道着を着ている。ちなみに、痴呆症ではない。多分。

場違いな男はあるが。

ここで

『アメリカンドリーム、ミスター・ゼンショイ』

などと言おう者なら、銃刀法違反など存在しないかのようにぱりさりと体が一等分されることは想像に難くない。

「至高の侍、絶映殿です」

和服を着た裏山はうやうやしく答えた。

「うむ」

絶映と呼ばれた中年の男は満足げに頷く。

「ござり、入られい」

道場の中では弟子と思しき青少年たちが槍を振るつていた。

勇壯な掛け声とともに、槍の穂先が風を斬る音が響く。

「これはこれは。さすが日本武士道党の藤崎絶映殿」

「これは竹槍戦闘機落としの基礎じや。訓練を積み重ねると、ワシのように戦闘機を一撃で叩き落せるようになる」

「こいつはアホかとか突つ込んではいけない。

突つ込んだ瞬間に手裏剣が飛んでくることは確実である。

「して、何用か？」

「はい。実は日本武士道党と共に、我タルエビザ教団が日本いや世界を支配しようと思つております。是非ご協力をと」

鬚を結つた変な男は考えた。

世界を支配すればむふふなこともぐへんなこともやりたい放題である、と。中身は煩惱の塊である。

「よからうつて」

馬鹿は使い勝手がいい。

裏山は内心ほくそえんでいた。

「瑠絵美座教団なるものは、異国を滅しようとしているのか？」

「はい、それはもう。異国を撃滅し、倭國の教えを世界に広めるために活動している邪教……げふんげふん、眞実の教団です。祈れよさすれば救われるがモツトーです」

本当のモツトーは金・ペテン・詐欺であることはもちろん隠している。

どこの国の総理大臣といい勝負である。

「偽りはあるまいな？」

「もちろんでござります」

「偽りあれば……滅ヅ！」

絶映が刀を振るつた。

真空の刃が空を裂き、隣の民家が消し飛ぶ。日常茶飯事なので、警察はこない。来たとしても返り討ちが関の山である。ここは本当に法治国家か？

「貴様が生きて帰れぬと知れい」

馬鹿を偽るなど造作もない。
裏山は作り笑いをしながら、絶映という人間兵器に頭を下げた。

第四話・生まれる時代を間違えた男（後書き）

こんばんは、ストレス解消に描いております。
おばかな内容ですが、楽しんでいただければ幸いです。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第五話・人間改造計画

巷で話題になつてゐるのは放射能問題である。

福島県にある原発が自称原子力天才大臣であるカンガンスにより爆発したことで、放射能がダダ漏れになつてゐるのだ。もちろん、自称天才は何も知らないし、何も出来ない。

そこで、人間が浴びることの出来る放射能基準値を大幅に引き上げた。

「必ずしも安全ではないということはない」という思いで、この基準値を設定した。ただちに影響はない。ただちに健康に被害が出るレベルではないという感じがしています」

こいつを選んだ国民はドMにも程があるだろとか突っ込んではいけない。

あの頃はマスメディアに踊らされていたのだから。にしても、普通の政治家と売国奴を見分けられない国民は十分救いようがないのかもしない。

それはさておき、これまでの基準値、すなわち一年間に1ミリシーベルトといふ基準値は20ミリシーベルトまでがばつと引き上げられた。国際基準？ 何それ美味しいの？

「国民は復興への新たな思いとともに、死力を尽くし！ 引き続き政権を担つていく！ もちろん！ 朝鮮連王国の方々の指導の下、我々は日本自治区を作り上げていくのだ」

ヒトラーもびっくりの売国路線まつしぐらである。

裏山は桜ノ宮学園理事長室で頭を抱えていた。

さすがの絶映でも放射能には勝てない。

しかし、こんな時に余計なことをしやがつてと悪態をついても始まらない。何か対策を講じなければならぬと考えていた。

だが、現役職員ではこれに対処できるスキルを持った者がいない。蒼枝は暴力一辺倒だし、加島は盜賊技術のみ。教団には呪術が使えるものがいるが、防御術は使えない。

「参りましたね。あのオタンコナスどもめ

マスメディアは放射能の危険性について一切報じない。それどころか、国営テレビ局では与党のプロパガンダ『英雄王伝説』愛の軌跡』という番組を半日で放送している。

こうやって何も考えない人間は洗脳されていくわけだ。

テレビ画面の中では鳩川紀夫が愛の説教を行い、小川一郎英雄像が原宿に出来るという工程表が公開されていた。自称アイドル議員ランボーの密着取材も毎日放送されている。

その中身のないテレビ番組を、せんべいをかじりながら見ている裏山。

手詰まりになつた。

「まったく。ババアの密着取材なんていらないんですよ。ロリツイン美少女なら見る価値があるんですけどね」
三枚目のせんべいを飲み込んだ時だった。

「大司教！」

ドアを開いたのはオダイインだ。裏山の部下で教団の司祭である。

「何だね？」

「桜ノ富山の採掘ツアー招待状が来ておりますが」

「ここはモンーンの世界かね。私は暇ではないんだよ。それに……」

「採掘？ 鉱山？」

「どうか、あいつがいる。

ぐへへと笑つて、オダイインに話を聞くことにした。

「オダイイン。その話、詳しく話しなさい」

裏山は、ある可能性にかけた。

そこには科学のスペシャリストが隠居している可能性が高いのだ。

第五話・人間改造計画（後書き）

ここにちは、連続投稿です。

相変わらずおばかなストーリーです。別のところで作ってる話はクソまじめなので

こちりで息抜きをとした結果なのですが（笑）

それはさておき……

一部の皆様、本当に「めんなさい」。悪気はないんですが、あの番組名。ファンの方がおられましたら、今回は勘弁してください。もちろん、私もファンの一人です。

では、また次回お会いできることを祈りつつ……

第六話・電磁力じや！

「電磁力じや！」

山腹にある、山小屋から奇声が聞こえてきた。

それを聞いた裏山はニヤリとする。

間違いなく、目当ての人物の存在を確認したからだ。でなければ、富士山までわざわざ大司教自らが出向いたりはしない。

「ぐふふ、いまだ健在のようですね。オダイン、準備はいいですか？」

「万馬券が一万枚あるくらい大丈夫です」

「そうですか、不安ですね」

裏山は懐に手を入れながら山小屋の扉を開けた。

目の前にいたのは同じ職場でかつて働いていた元同僚だ。姿もあまり変わっていない。

「これはこれは虎谷先生。お元気でしたか」

うやうやしく裏山はあいさつする。

相手は白衣の老人だ。髪の毛は裏山と違い、ふさふさとしているが、雪原のように真っ白。両手には試験管が握られている。

「うむ」

タレ田は試験管を向いている。

「これは二トログリセリンじや」

「見れば分かります」

「これを……」

「これを？」

「振る！」

「やめ……」

「遅かった。

山小屋は爆発した。

「やれやれ、ひどい目にあいましたよ」
瓦礫を押しのけて、ようようと裏山は立ち上がった。

「電磁力じゃ！」

地面の下から声がある。

「のまま生き埋めにしたい」ところだつたが、裏山はぐつとじらされた。オーダイン」「ときはいくつとも替えが効くが、こいつはやつこつわけにはいかない。

「大丈夫ですか、先生」

「電磁力じゃ！」

利用する前に会話が成立しないのがなんとも切ない。

どこかの政党集団を思い出してしまつ。会話が成立しないゆえに強敵なのだ。

地面の中でもう一度爆発が起つた。

黒じげの白衣を着ている男がふらふらと瓦礫の中から出でてくる。
「実験は成功じゃ」

一体何の実験だったのだろうか。

ただ爆破テロを行つただけの感じしかない。

「おめでとうござります」

どこもめでたくないのだが、一応おだてておく。

「では、我タルエビザ教団と共に歩みませんか？ 教団に入れれば、研究は思いのまま。材料も何でも提供いたします」

「フッ素の沸点はどうなんじゃ？」

「分かりません。文系ですから」

「硫酸とカリウムを混ぜる。どうなるか？」

「そんなのどうでもいいですから、教団に協力しなさい。今、我々は政権を占領するために活動しているんです。我タルエビザ聖王党が日本を掌握すれば！ 研究実験は思いのままですよ」

「よからぬ。協力したる」

裏山はほくそえんだ。

なんと単純なヤツだろ？

蒼枝にしても、加島にしても、バカが多いのは助かる。

虎谷に一礼して、裏山は作り笑いを見せた。

「そういえば……連れはいいのか？」

虎谷が瓦礫の山を振り返る。

そういうえばオダイインがまだ埋もれているはずだ。

「いいんです、ヤツは教団資金を着服する不屈き者ですから。利用価値がなくなれば鍋刑にでも処そうかと思っていたので、手間が省けましたから」

「鍋刑とは何じや？」

「鍋のおたまで被告人をしばき倒して、グルグ火山の火口に放り投げることです」

ほどなくオダイインは瓦礫の下から、万馬券を握り締めて出てきた。

第六話・電磁力じゃ！（後書き）

ここにちは、バカな話の続きです。

千葉県沖の海底で通常の一一百倍のセシウムが検出されたとか。

これで安全安全言つてる連中が魚食えばいいこと思つ次第です。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

第七話：仮敵退散

とりあえず原発問題担当は決まった。ただし、解決能力には疑問符がつくが。

次は文部科学行政を担う者が必要である。

そこで裏山はかつての先輩教師を尋ねることにした。

彼は大仙の麓で隠遁生活をしているといつ。

大仙は最近噴火が続いていると周囲の住民が語っていた。時折、大きな爆音がしたかと思うと、土砂崩れが起ることがあるようだ。しかし、火山灰やマグマが噴出すわけではない。その点、生活に直接支障が出るわけではなかつた。

JRの鳥取駅に到着した裏山は駅前にあつたタクシーをジャックして、大仙の麓まで向かわせた。

麓に着くと、そこにあつた村のはずれに一軒家がある。

レンガ造りの家だ。西洋風に造られたそれは風景にはなじんでいない。

「やれやれここですか」

裏山はタクシーの運転手にさるべつわをはめた後、タクシーから降りた。もちろん、タクシー代など払うわけがない。

玄関のドアにはルエビザ教団の紋章が彫られていた。この家の住人は元ルエビザ教団大司祭であった男である。

裏山はそのドアを四回ノックした。

「どうぞお入りください」

優しげな声が返ってくる。裏山は懐の拳銃をいつでも抜ける状態にして、ドアを開いた。

そこには波平さんのような禿頭の老人がいる。特徴的なのは細目だ。目を開いているのかどうかすら分からぬほどなのだ。

「君は裏山君。どうかしたのですか」

「はい。実は田島先生、あなたにお願いがあつて参りました。ある勢力を駆逐するための、是非あなたのお力を借りしたいのです」「私は神仏に帰依しています。もう戦争や紛争には関わりたくないません」

「その神仏をないがしろにする連中が現れた、といつてもですか？」

田島の目が開いた。

「……洞窟のイデアをまだ分からぬ愚物がいるようですね」

その前にあなたの言葉の意味が分かりませんよ、とは裏山は突っ込まない。ここで突っ込んだら間違いなく標的にされるからだ。キレた田島ほど恐ろしいものはないと彼は認識している。

どこからか口ケツトランチャーを取り出している。彼の教団時代のあだ名は『爆裂神父』や『破壊の大司祭』である。この武器で彼は異教徒たちを殲滅したことは裏社会では有名な話だった。

「さあ、あなたのそのお力で！ いざ、異教徒どもを殲滅しに参りましようぞ！」

「アリストテレサー！」

多分アイサーの意味なんだろうと裏山は勝手に解釈した。後々彼を味方にしたこと後悔するのですがそれはまた後のお話。

こうして着々と戦力を整えていったが、裏山は味方の中でも不穏な動きがあることを察知していなかつた。これは裏山としては致命的だつたかもしけない。

第七話・仮敵退散（後書き）

こんばんは、Jokerです。

ストレス発散に描いた結果がコレだよ（おーん）

ではまた次回お会いできる」とを祈りつつ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9614m/>

ザビエル＝クエスト

2011年12月25日22時58分発行